

いたずらっ子

アンデルセン作

ある晩、おじいさんが、家の中にすわっていたときのことでした。表は、すさまじいあらしになりました。

雨が、たきのように降ってきましたが、おじいさんの詩人^{しじゆん}は、部屋の中のだんろのそばで、気持よく暖まっていました。だんろでは、火が赤々と、燃えていました。

リンゴが、ジュージュー、おいしそうに焼けていました。

「こんなあらしのとき、外にいるものはかわいそうだなあ。着物も、びしょぬれになってしまうだろう」と、

おじいさんの詩人^{しじゆん}は言いました。

「こんなに、心のやさしい人だったのです。

ちよと、そのよきです。戸の外から、

「あけてください。ぼく、びしょぬれで、

寒くてたままないのー」と

さげぶ、小さな子供の声が聞えました。

(小学五・六年生課題)